

第1回同窓会講演会 開催報告



安井清子さん(高校32回)

去る2012年10月13日(土)中野ゼロにて第1回同窓会講演会が行われた。同講演会は若竹会員の世代間を超えた交流の機会を提供することを目的に若竹会が2012年度よりイベント部会(仮名、高校32回・吉田裕之部会長)を設置し、初めて企画・実施するもので52名(高校9～61回)と多くのご参加者となった。同講演会のこけら落としとして、高校32回(1980年卒)の安井清子さんと川口健一さんの同期コンビにご講演をお願いした。

安井清子さんは1984年国際基督教大学教養学部をご卒業され、国際NGOシャンティ国際ボランティア会を通じて、ベトナム戦争を起因として設営されたラオス難民キャンプに1992年より5年間滞在し、結果的に子供達の教育を担うことになる“子ども図書館”を設立された。またキャンプに住む、文字を持たないモン族口伝の民話収集等を行い、現地での信頼・やりがいを得て、その後現地住民のため、現地に住み、図書館、基金の設立、多くの著書の執筆など、精力的にボランティア活動をされている。ご講演では富士高校卒業後から現在までの過程とその時々思いを語っていただき、便利とは真逆の生活から、人間として何が大切なのかを教えられるものであった。

川口健一さんは1985年早稲田大学理工学部建築工学科をご卒業され、本人談にもあったが紆余曲折で、生え抜き以外では異例の東京大学の教授となられた。現在は東大生産技

術研究所で建築構造の安全性に関する研究をされている。特に大震災後は建物に与える影響に関する多くのテレビ出演、現場の建設技術指導をされるなど、業界の第一人者としてご活躍されている。ご講演では工学、デザイン双方の観点から見た建築物の歴史と今後、地震動に対する建物の安全性について語られた。後者は特にご専門で、耐震技術向上に伴い建物強度は高まったが天井等が落下する問題があり、早急な対応をすべきであるご提言された。技術的な話題であったが誰もが感覚的に理解し、うなずけるご講演であった。



川口健一さん(高校32回)

同講演会後の懇親会では「高校生にも聞かせたい内容」との発言が相次ぎ、今後の活動に向け手ごたえを感じるものであった。

2人の同期のご講演を通じて、同じ時空間で共に過ごすも、全く異なった方向性でトップランナーとなっ



中野ゼロホール・会場風景

ていることに強く感動を受けた。そして、同講演会の企画会議で諸先輩方との語らいを思い出した。

「我が校の伝統とは何か？」との問いに各代の話を総じて、特筆すべき伝統といえるイベント・風習・規則は存在しない。長い歴史がある第五高女、富士高の卒業生皆が口を揃えるのは“自由”であった。唯一残存する伝統“自由”は、既成概念がなく、先輩たちの作り上げたものを破壊し、新たなものを創造する。つまり見かけ上、先輩から何も引き継がれていないのは、破壊と創造を繰り返す“自由”という校風が各学年に生き続けている証拠である。我らが学び舎では個々の創造的な感性が生まれ、幅広い分野で活躍する同志が輩出されている。今後も多方面でご活躍されている若竹会員のご講演を拝聴できる刺激的な会としていく所存である。

若竹会幹事 加藤 拓磨（高校50回）

若竹会会員、 富士高キャリアセミナー講師に

富士高校PTAより、若竹会にキャリア講演会の依頼が来たのは、8月上旬でした。フェイスブックで講演をお願いできる方を募ったところ、15回～46回の方まで、6名もの方々が手を上げてくださいました。今回、なるべく現場に近い方をというPTAの選考基準から、若いお二方が選ばれました。一人は42回（1990年卒業）小学校教師の長井祐子さん、もう一人は46回（1994年卒業）フリーライターとして有名女性誌に記事を投稿されている藤島由希さんでした。

当日はオープン授業という事で私も聴きに行きました。校長室前でちょっと緊張気味のお二人に初対面のご挨拶をして、まずは長井祐子さんの講演を聴かせていただく事にしました。教室には30人程の生徒。後ろの空いている席に座ってみると、何か高校時代にタイムスリップした様な錯覚を覚えました。長井さんは教師らしく、所々虫食い問題のあるプリントを用意していました。生徒にクイズ形式で問い掛けながら「小学校教師の大変さとやりがい」を伝

えていくところは、さすが教育のプロという感じ。小学生パワーに圧倒されながらも、その素直さ、吸収力に驚く日々。体育祭などではヘトヘトになりながらも、生徒の成長が心の支えになっている事がよく伝わって来ました。時々小学生の口真似をしながら、小学生の生意気さ、可愛さを表現する長井さんのトークに、生徒からも次第に笑いが起きていました。

二時限目は、藤島由希さん。聴講の生徒は10人位。やはり高1からライター志望の人はそうはいない。長井さんが立って講演をしたのに対し、藤島さんは生徒に向かい合って座り、頬杖をつきながら気さくに語りかけていきます。「物書きになりたい人は？」「ふーん、でもモテないよ。」こんな感じ。「フリーライターは、取材をして文章を書いて買ってもらう職業。才能があるのは当たり前。」「最初は原稿料も安く、仕事を沢山抱えて体を壊す人も多い。ノマド（自宅で仕事ができる）の良さもあるがその分誘惑も多く、自己管理が出来ないと一流にはなれない。」「仕事をいただく上で一番大切なのは、またあの人と仕事がしたいと思ってもらえる事」と、サラリーマンの私には刺激的な内容でした。「フリーライターをやっていて、本当にやりがいを感じる事は、いろんな人に会える事。やはり一流の人から吸収する事が沢山ある」との事でした。

お二人の講演は、後輩の将来の選択に向けて、きちんと情報を準備し、仕事の厳しさと喜びをしっかりと伝えていただいたと思います。長井さん、藤島さん、本当にありがとうございました。

吉田 裕之（高校32回）

